青梅市文化財ニュース

第３０８号

平成２５年６月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅は城下町？

青梅市内には、六か所に城跡が確認されている。面積が最も広い城跡は東青梅（師岡）にある勝沼城、標高が最も高いのは二俣尾にある辛垣城と枡形山城、霞川の近くに築かれているのは藤橋城と今井城、山麓に築かれているのは楯ノ館（城）である。一つの自治体に、これほど多くの城跡が存在するのは珍しい。

青梅市を中心とした一帯は、鎌倉時代（1192～1333 年）中期頃から三田氏と称する豪族が支配していた。根ヶ布にある天寧寺の釣鐘などによると、三田氏は平 將門の後裔だったと伝えられる。その三田氏が本拠地として築いた城が、東青梅に残っている勝沼城。城は関東山地（奥多摩）から東方へ延びる、丘陵地の尾根を巧みに利用して造った平山城である。丘陵の上では、日常的な生活をするのは不便なため、日頃は周辺の山麓で生活し、敵が攻撃した時は、丘陵の上に築かれた城に立て籠もる形式となっている。

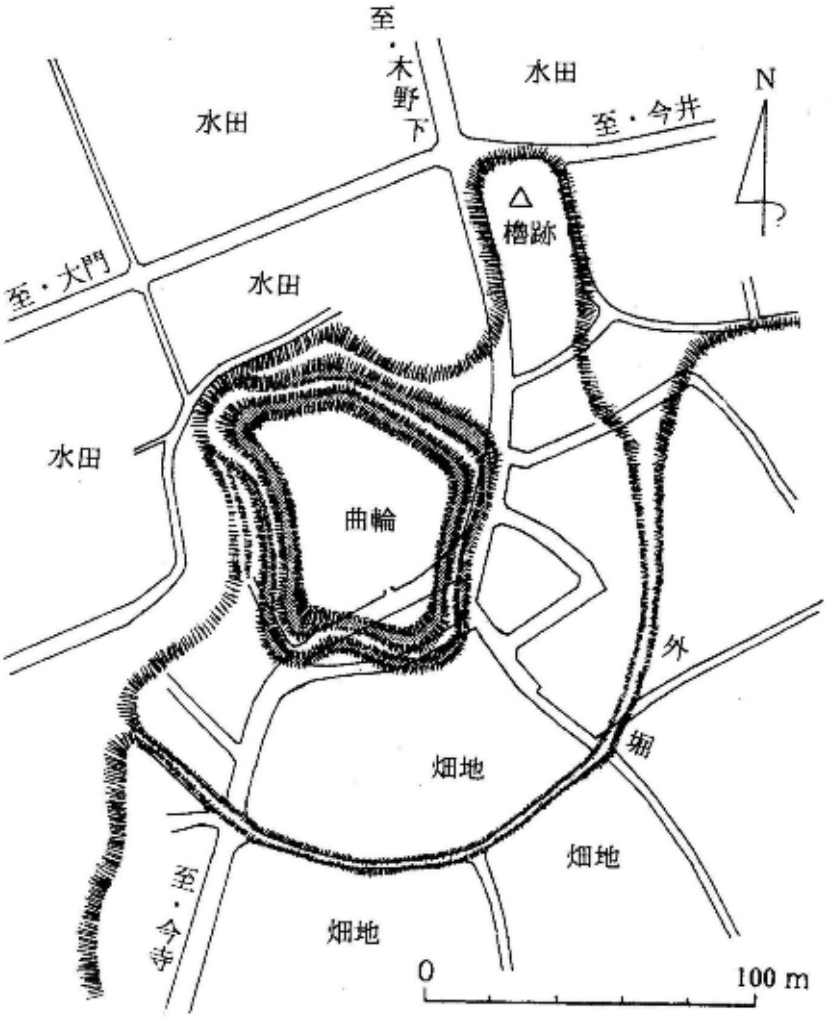
多摩川の南岸では、長淵一丁目には三田館と称する小さな城跡があった。高台にある城は、多摩川を渡る人々を見張っていたのであろう。

青梅市の東端に位置する今井城は、鎌倉時代末期あるいは室町時代前期に築かれ、城主は今井氏である。今井氏が支配した土地だから、地名が「今井」になったのか、逆に、豪族が今井に来て地区を支配し、地名をとって今井氏を名乗ったのかは不明である。この今井氏が支配した今井城は、室町時代中期に滅亡してしまった。

永禄年間（1558～1570）、世は戦国時代である。群雄割拠、各地の戦国大名は天下を支配するため、戦（いくさ）を繰り返していた。南関東地方では小田原を根拠地とする北条氏が支配し、北関東地方は越後を根拠地としていた上杉氏が支配し、勝沼城主の三田氏は上杉氏と同盟を組んでいた。北条氏勢力から見ると、三田氏は上杉氏勢力の最先端に位置する敵である。そのため、三田氏は北条氏の攻撃に備え、滅亡した今井城を再構築した。さらに、今井城と勝沼城の間に藤橋城を築き、東方の防衛とした。根拠地の勝沼城が北条氏の軍勢に襲われることを予測し、籠城するため二俣尾に辛垣城を築き、その前衛と

して楯ノ館（城）を構えた。

このような防衛体制を整えたにもかかわらず、永禄５（1562）年頃、三田氏は北条氏の激しい攻撃で、敗北してしまった。勝利した北条氏は、それまで三田氏の領地を師岡山城守將景氏に与えたため、旧勝沼城は師岡城と改称されるようになった。



藤橋城跡

世は戦国時代である。北条氏は関東山地を越えた西方の、甲州を支配する武田氏の攻撃に備えるため、師岡城を整備し、また辛垣城の近くで眺望が良い枡形山城を築いた。しかしながら、天正 18（1590）年６月、北条氏は織田信長の後を継いだ豊臣秀吉勢によって攻撃され、北条氏の支城であった師岡城は勿論のこと、枡形山城も廃墟になってしまった。

「城下町」とは、城を中心として形成された織豊時代以降の集落なので、青梅市は城下町ではない。しかしながら、一つの自治体に多くの中世城郭があるのも珍しい。

なお、青梅市内の城跡と歴史については、市民センター（地域図書館）に開架されている『青梅歴史物語』に詳しく述べられています。また、青梅市教育委員会では、年間に４回、「わがまち青梅」と題して文化財散策を行っており、城跡を始めとする史跡を訪れています。開催時期などについては、青梅市広報に掲載されます。参加してみませんか。

（文責　角田　清美）